今日のみ言葉 216「日々、私たちを担い、救われる神」2012.6.10

主をたたえよ
日々、わたしたちを担い、救われる神を。
この神はわたしたちの神、救いの御業の神
主、死から解き放つ神。 （詩篇68の20～21）

Praise the Lord,
who carries us along, day after day;
He is the God who saves us.
Our God is a God of salvation,
and to GOD, the Lord, deliverances from death.

私たちの日々は、さまざまの問題が生じてくる。子どものとき、元気にあふれていてこの世の闇を知らないとき、あるいは成人してからも特別な事故や病気、職業上でも困難など起こらない限り、自分の力で生きているように思っていて、自分を担ってくれるものなど考えることもしない。
しかし、ひとたび病気になり、苦しみにあえぐことになったり、家庭の問題が深刻な状況になったり、職場にて耐えられないようなことが生じたときには、生きていけないと感じることが生じる。 そうでなくとも、若きときから、すでにこの世の問題や人間関係に悩み、この世の闇を思い知らされたときには、やはり生きることに望みがなくなる。
そのようなとき、このみ言葉にあるように、日々私たちを担って下さる神、その苦境から救って下さる神がおられるということを知ることはいかに大きな恵みとなることだろう。自分で自分の苦しみや病気を担えない―老齢になるとこれはいっそう切実になる。 自分の犯した罪ゆえに事態がもとに戻らないことを深く思うほど、その自らの罪をも負いきれないと感じることになる。
また、家族に難しい病気をもった人、あるいは障がいをもった家族や、介護の困難な高齢者を担う責任のある場合、そのときも、担いきれない重さに苦しまねばならなくなる。
「星の王子さま」という童話に、ある星に酒飲みがいた。王子さまが、なぜ酒を飲むのかと尋ねたら、彼は、「忘れたいからだ」 と答えたというところがある。これは、自分自身や周囲の人たちの罪深い現実に日々直面して、それをひとときの間でも忘れて、アルコールという化学物質の力で一時的に陽気になり、重荷などなかったような気持ちになりたいということである。
どんな人でも担えない重荷、それは死の力が迫ってくることだと言えよう。さまざまの内容をもった各人の日々の重荷の苦しみも、それは、その重荷が死に近づかせようとする力をもっているからである。この詩の作者は、日々の重荷を担って下さる神は、人間の最終的な重荷である死ということからも解放して下さるということを知っていた。
主イエスは、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう。」（マタイ福音書11の28）と言われたが、この言葉は、上にあげた聖句と響きあうものである。 たしかに、キリストは死の力に勝利され、私たちに復活の力を与え、最終的に私たちが死の力からも解き放たれることを約束してくださっている。
 この真理を信じることができるのは何と大きな恵みであるだろう。

野草と樹木たち　ウツボグサ　シソ科　日峰山（徳島県小松島市）　2012.6.10撮影

野生の花としては、大きく、美しいこの花は、6月になると紫色の花がその特徴ある花穂（かすい）に次々と咲いてきます。この色合いや形の美のゆえに、かつて写真雑誌の表紙に大きく取り上げられていたことがあります。唇形の花びらの下部をよくみると、こまかな鋸歯（きょし）がついているのがわかります。創造主はこのような小さな部分にもその英知をもってなされているのを感じます。

これは、日当たりのよい山野に自生し、高さは20～30cm。野生のものは、あまり見られないものです。このような美しい花は、見つけると抜き取られてしまうことが多いからでもあり、また繁殖は土などの条件が合わないと難しいようです。私が出会ったもののうちでは、徳島県の1500mほどの高丸山の山頂付近に自生していたものや、山形県の月山（がっさん）にて、タテヤマウツボグサという高山性のもの、あるいは、四国最大の河川である吉野川の河口から30Kほど上流のあるところだけに群生しているものとかが印象的に残っています。その他、各地の山を歩いていると、花の時期を過ぎて褐色になった花穂に出会うことは折々にあります。

　ウツボ（靫）とは、円筒状の矢の入れ物のことで、この花の花穂がそれに似ているからです。

　しかし、この花の花穂からは、矢の入れ物とは全くちがって、唇形の花が下から次々と現れる花の入れ物のようです。このウツボグサは、日本以外にも北半球の温帯に広く分布するとのこと、この花穂は花が終わると、次第に褐色となり、夏枯草（カコソウ）とも言われます。これは、生薬として用いられ、利尿剤として知られ、腎臓炎、膀胱炎などにも用いられ、ヨーロッパにおいても民間薬として、結核や胃腸の病に用いたと記されています。

このように体にとっての薬となる野草ですが、さらに、見て美しく、それゆえに心の薬ともなります。　その他の植物も、ただ群生しているだけでその緑色の広がりは心をいやすものです。都会ではこうしたよき植物に直接に接することが難しいですが、万能の神は、求めるものには、心の畑によき花を咲かせることができます。「荒野に水が流れ、砂漠に花が咲く…」（イザヤ書35章）と、聖書の預言者が記していますが、私たちの一人一人の心の荒れ地に神がこのようなよき花を咲かせてくださいますようにと願います。　（写真、文 T.YOSHIMURA）